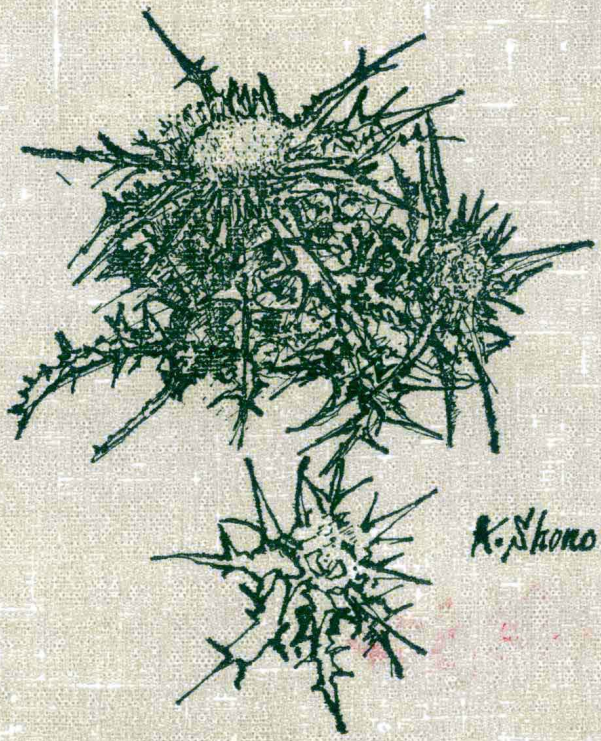
カフカと
現代日本文学

有村隆広　八木 浩 編



同 学 社

カフカと
現代日本文学

有村隆広　八木 浩 編

Die moderne japanische Literatur und Franz Kafka

Hrsg. von T. Arimura und H. Yagi

同 学 社

執筆者紹介

八木　浩　大阪外国語大学教授
Hiroshi Yagi

有村隆広　九州大学助教授
Takahiro Arimura

立花健吾　福岡大学助教授
Kengo Tachibana

中尾光延　山口大学助教授
Mitsunobu Nakao

河中正彦　山口大学助教授
Masahiko Kawanaka

山中博心　福岡大学助教授
Hiroshi Yamanaka

安藤秀國　愛媛大学助教授
Hidekuni Ando

検印廃止

© カフカと現代日本文学
Die moderne japanische
Literatur und Franz Kafka

1985年10月1日　初版発行　　定価 2,600円

編　者　有村隆広
　　八木　浩
発行者　近藤久寿治
印刷所　研究社印刷株式会社

発所行　株式会社 同学社
〒112 東京都文京区水道 1-10-7
電話 (816) 7011 (代)・振替東京 5-166920

ISEN 4-8102-0071-0

[井上製本]

まえがき

カフカの文学は第二次世界大戦後、世界文学の中に本格的に登場し、不条理の文学としてまたたく間に、ヨーロッパ、アメリカ、日本へと広まり、カフカ・ブームを惹き起こした。その際、人々は、「カフカ的」ということばに、シェイクスピア的とか、ゲーテ的とかいうような教養概念とはまったく異質のものを感じた。

カフカの文学が日本の読者層に読まれはじめたのは昭和二〇年代の後半からである。しかし、ドイツ文学者の岡村弘は、それよりも約二〇年前、昭和九(一九三四)年にカフカに関する論文を書いている。同じくドイツ文学者の本野亨一は、昭和一五(一九四〇)年に、『審判』を翻訳している。また、作家の中島敦は、昭和九年頃、英訳で、『建設』(『穴巣』)を読み、深い感銘を受けている。

このようにみてくると、日本におけるカフカ受容は思いのほか早いことが理解できる。しかし、カフカの文学を自分たちの世代のものとして積極的にとらえようとしたのは、第二次世界大戦直後から創作活動を始めた評論家、作家たちである。先ず最初に花田清輝がカフカを論じ、その影響を受けて

安部公房や島尾敏雄等がカフカ文学に注目している。安部は、『審判』のモチーフをその作品に応用し、島尾は、カフカの夢の手法の中に自分の文学との類似性を認めている。

昭和三〇年代に入ると、倉橋由美子は、カフカの技法を自分の小説に取り入れ、少し間を置いて、小川国夫は、変身譚からカフカに近づいている。さらにジャンルを越えて、演劇の分野へのカフカの影響も無視できない。また、SF、推理小説の分野でも、カフカ文学の有する「非日常性」に着目して、その作風にカフカ的なものを取り入れた作家達もいる。また時代は溯るが、宮沢賢治のように、カフカ文学との直接的な接触はなくても、カフカとの類似性を指摘される作家も存在していた。

本書では、これら日本の作家、評論家たちが、カフカ文学をどのように受容したか、両者はどのように対比されるのか、さらにまた、カフカ文学は現代日本文学の中でどのような意味を有しているかについて、それぞれの担当者が論ずる。

昭和六〇年五月

有村隆広

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

目　次

まえがき

序章　日本におけるカフカ受容……有村隆広……1

（第一部）

第一章　カフカと中島敦——象徴と変身——……八木浩……28

第二章　カフカと宮沢賢治——田舎医者と修羅——……中尾光延……57

（第二部）

第三章　島尾敏雄のカフカ受容……立花健吾……86

第四章　カフカと安部公房……山中博心……107
——その自我像、定着と流動——
第五章　カフカと安部の小説……有村隆広……145
——『審判』と『壁—S・カルマ氏の犯罪』——
第六章　倉橋由美子におけるカフカ像……安藤秀國……171
第七章　倉橋由美子とカフカ……中尾光延……196
第八章　カフカと小川国夫……河中正彦……221
——比較変身論——
（第三部）
第九章　カフカと花田清輝……河中正彦……248
第十章　カフカとSF　推理小説……安藤秀國……273
第十一章　カフカと新劇……八木浩……299
第十二章　比較文学研究の方法論的考察……安藤秀國……326

座談会――結びにかえて―― ……352
あとがき ……373
主要参考文献 ……377
年表 ……389

序章　日本におけるカフカ受容

有村隆広

一　カフカ理解の背景

一九八三年六月末日、西ドイツのマインツで国際カフカ・シンポジウムが開催され、私もそれに参加した。シンポジウムの二日目、ライン河を遙かに見おろす丘の上のレストランで懇親会が開かれた。ライン・ヘッセンのワインを飲みながら談笑していると、あるドイツ人の比較文学者が、日本にはカフカ文学を受容する土台が整っているのかと私に質問した。

その研究者は日本の事情にもある程度通じていたので、それだけ一層彼の発言は私の心に重くのしかかってきた。同時にまた、私は日本にいるドイツ人の友人のなげきを思いだした。ある時、彼は京都のある寺院で庭園を鑑賞していた。その時彼の後を若い女性の一団が通り過ぎながら、この外人、本当に庭がわかるのかしらと、ささやき合った。そのことを耳にしたとき、大変ショックを受けたと、そのドイツ人は私に話した。

比較文学者とそれら若い女性たちを同じ次元に置くわけにはゆかないが、これら二人の場合にみられるような意見は、その妥当性の度合は異なれ、異文化を鑑賞し受容する場合には必ずでてくる「批評」である。同時に、このような「批評」は異文化を研究する者にとっては、常に銘記しておくべきことでもある。

一九八二年から八三年にかけて私は二度目のドイツ留学をボン大学で過した。そしていくつかのドイツ文学関係のゼミに参加した。出席者のほとんどは当然のことながらドイツ人の学生である。一見すると共通のテーマを論じている出席者は、皆同じように見える。しかし、もう少し深く観察するならば、彼らドイツ人の学生たちと私たち外国人との間には大きな違いがある。

彼らはギリシア・ローマ時代、そしてルネサンスを経て形成されたヨーロッパ文化の伝統を受け継ぎ、それらが血となり肉となっている。そしてその同じ伝統を引き継いだ作家を研究の対象としている。ところが私たちの場合にはそうではない。古事記、日本書紀を創り、万葉の歌を詠んだ人々の子孫であり、神道、仏教、そして儒教の教えによってはぐくまれてきた民族の一員である。

彼らドイツ人たちは素直にゲーテやカフカの世界に入ってゆく。そしてそれらを受け入れる。ところが私たちにとってはそうではない。たとえヨーロッパ的教養を身に付けているとはいえ、それら作家たちとの間に一種の断絶を感ずる。そしてその断絶を意識的に克服して、しかる後テーマに取り組んでゆく。

彼らは自分たちの尺度でゲーテやカフカの世界を測定し、それらを定義付けしようとする。私たち日本人はヨーロッパの尺度で理解しようと努めながらも、ともすると日本の伝統文化に即したやり方で理解しようとする。したがって彼らドイツ人とは異なり、作家を理解する場合には、好むと好まざるとにかかわらず常に二種類の尺度を有していることになる。彼らドイツ人が感じるようには感じることができないし、また彼らが考えるようには考えることができない。このようなことに思いを駆せると、ゼミに参加しながら私はある種の異和感、孤独感に襲われることがたびたびあった。

カフカ理解についての疑義をただしたあの比較文学者の指摘は、さらに分析すれば、受容する側の文化的背景のことも考慮すべきであるということにもつながる。また、何の気なしに、「わかるかしら」と一言批評した若い女性たちも、無意識のうちにそのドイツ人の生れ育った環境とその伝統を、日本の文化と対比させながら発言したのであろう。

ハーバマースは、解釈者はその生れ育った伝統文化から切り離されては対象を解釈することはできないと述べているが、異文化を理解しようとする場合には、常に彼の言を記憶しておかなければならない。

しかしともあれ、カフカの文学は日本の社会に受け入れられ、かなりの影響を第二次世界大戦後の日本文学に与えている。ヨーロッパとはまったく異なる文化圏で、彼の文学は現実のものとして受容されている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

カフカの文学が日本の社会に受け入れられるためには、彼の文学を受け入れるだけの文化的諸条件が整っていなければならない。その外的条件は、一切の価値が転倒した第二次世界大戦後の混沌とした社会情勢である。もしカフカを受容するだけの基盤がなければ、彼が如何に特異な才能を有していたにしろ、日本の社会では受け入れられない。カフカの文学を賛美し、かつ批評する読者なくしては、彼の文学的存在はありえない。

第一次世界大戦後のドイツでは、ゲーテに比してクライストの文学が脚光を浴びるようになった。クライストの死後、一〇〇年は優に経過した後である。それはクライストの文学が第一次世界大戦後の絶望的な若者たちの心に訴えるものがあったからである。それに対してゲーテは当時はそれほど読まれなかった。その理由としては、ゲーテの思想が当時の人々の虚無的な気持にぴったりこなかったことが挙げられる。それゆえに当時の若い世代はゲーテよりもクライストの文学を好んだのである。

これは、読者が作家を選んだ一例である。カフカもやはり日本の読者に選ばれ、受容され、それゆえに現在では、日本人の心の中に、すなわち世界人としての日本人の心の中に生きはじめている。受容の仕方はヨーロッパとは異なれ、カフカの文学が日本のある種の作家、読者をとらえ、そしてそれが持続していることはまぎれもない事実である。

二　日本におけるカフカ研究の一断面

外国文学を鑑賞し、かつ批評する場合には、ふつう二つのタイプに分けることができる。その第一は、一般読者、評論家、そしてその外国の文学を研究している研究者である。その第二は、現実に作品を書き、創作する作家、詩人たちである。日本におけるカフカ受容の場合も、やはり二つに分けることができる。本節ではその第一のタイプについて論じてみよう。

ドイツ文学者として日本で最初にカフカ論を執筆したのは岡村弘氏であり、その論文「フランツ・カフカ」は昭和七（一九三二）年、東大の『独逸文学研究』第一号に発表されている。彼がカフカをどのように解釈しているかは私の興味をそそった。その際の最大の関心事は、彼が当時すでに他のカフカ研究者の論文を参考にしているか、あるいはカフカの作品そのものだけから論文を執筆したかどうかであった。（なお、羽白幸雄氏は昭和八年カフカの小品を翻訳している。二四九頁参照。）

一九三二年といえばカフカ死してわずか八年であった。またナチスの台頭により、ドイツならびにドイツ語圏の作家や評論家たちは言論の自由が犯されつつあるのを感じ始めていた。したがってカフカについての研究資料はまだそれほど出版されてはいなかった。ましてや、それらの資料が極東の日本まで到達できるのは稀ではないかと私は考えていた。それゆえにそれだけ一層岡村論文に関心を寄

せたのである。岡村氏は、『変身』を評して次のように論述している。

この悪魔にも似た一篇が読者の心底に刻みつけて行くものは何か？　マックス・ブロートやウィリー・ハースの謂ふところの『人間の寂寥』私が『小市民層の孤独感、寂寥感』と言ふ方がより正しいと信じる所のものである。……この『寂寥』こそ小市民作家フランツ・カフカの全作品の基調をなすものであり、同時に現代のあらゆる純粋な小市民層芸術の底を流れる地下水であるだろう。

岡村氏は、カフカ研究者が今でもよく引用するブロートやハースの説を、すでに彼自身のカフカ論に応用している。一九三〇年代のカフカ研究の実態を同氏はかなりよく知っていたことになる。なお、同氏が使用している「小市民層」は、昭和初年代の日本の実情を鑑みると、ブルジョアでもなければ、そうかといってプロレタリアでもない中間層のインテリ(市民階級)のことを指しているものと思われる。さらに岡村氏は、カフカを論評した理由を次のように述べている。

といふのは彼の芸術的タレントが十年やそこらの歳月で忘れられる程卑小なものではないと言わんとするのではなく、思想的に充分彼が未だ今日の作家であり、殊に我国の小市民作家達にとっては彼等の明日の道を示している作家でさえあるかも知れないといふ意味である。私が敢えて

カフカ紹介の筆を起した所以である。

岡村氏は、カフカの才能を見通している。さらに、カフカが「未来」の日本作家たちの指標となるかも知れないと予言している。同氏の予言は、本書で示すように現実のものとなっている。なお、第二次世界大戦前に書かれたドイツ文学者のカフカ論は、この岡村氏のものだけだと思われる。

第二次大戦後になり、山下肇、本野亨一氏等がカフカ論を書き始めている。先ず、山下肇氏の論文「実存のロマネスク」(『思想』昭和二三年一月号)が、名実ともに戦後第一のカフカ論であったといってよかろう。(ただし、花田清輝も昭和二一年、カフカについて論じている。二五五頁。)

山下氏は、カフカの文学がリルケとともに第二次世界大戦前後のフランスに多大の影響を与えたと述べ、それに呼応してアメリカ、イギリスでもカフカ・ブームが起ったことを指摘する。同氏は、カフカの文学をサルトル、カミュ等の実存主義者の思想を介して、カフカを実存主義的な作家のひとりとみなしている。ちなみに、山下氏はカフカ文学が有しているとされる「実存概念」について次のように述べている。

「生」といい「実存」といっても、それはいわゆる概念ではなくして既成のあらゆる形式の反極としての一表識にすぎず、必然的にある不正確な論理的曖昧さを脱することはできない。一切の媒介を排して、この表識の以前または彼方に意識されたある本質の動性そのものが直接、生と

しての生、実存としての実存なのであるから、事柄自体がすでに表現の可能性を制約している。

山下氏は「実存概念」を、「既成のあらゆる形式の反極」としてとらえている。すなわち、従来の伝統的な一切の価値を否定するものとして理解している。このようなとらえ方は、第二次世界大戦後の混乱を身をもって体験した当時の日本の知識人たちの共感を呼んだといえよう。さらに山下氏はカフカをキルケゴールとパスカルに結びつけて考え、またハイデッガーの実存哲学、「死への存在」との関係で論じ、カフカ文学を一九世紀から二〇世紀初頭にかけてのヨーロッパの思想史の中でとらえようとしている。同氏のカフカ論は日本における本格的なカフカ論の最初のひとつといってよかろう。

次に同じく第二次大戦直後に執筆された本野亨一氏のカフカ論「不安と脱出――フランツ・カフカ論」に触れてみよう。同氏のこの論文は昭和二三(一九四八)年、『世界文学』二月号に掲載されている。ちなみに『世界文学』は月刊誌で、第二次世界大戦直後の世界文学の動向を伝えるための雑誌であり、当時のヨーロッパ文学の動向を意欲的に伝えている。この雑誌は戦時中の知的空白を体験した当時の青年たちにとっては、知識の泉であったといえよう。二〇年前に死去したカフカも、「第二次大戦直後の文学作品」として見なされているのは注目に価する。

本野氏はそのカフカ論を試みるにあたり、『ある戦いの記録』、短編集の『観察』、『日記』、ならび

に後期の作品『学会への報告』の四つの素材をその資料としている。

先ず、本野氏は、カフカを「大都会プラハの街と対立する孤独の人」としてとらえ、カフカにとっては、プラハの街の雑沓は死の表情をたたえていたと分析する。それゆえにカフカは常に「不安」にさいなまれていたと述べ、その論拠を、短編集『観察』の中の小品に求めている。大都市に生きる市民の生活、都市の中の人間疎外はハインツ・ポリツァーも指摘しているように二〇世紀の最大の問題でもあるが、カフカの作品の中に、本野氏もいちはやくその徴候を発見したといえる。

本野氏はさらに『学会への報告』について、作者のカフカはその主人公の猿の行動に対して、「自由」という表現ではなくて、「脱出」ということばを使わせている点に着目する。

カフカの最後的な姿勢のなかで不安と絶望と疲労と背中合せになりぎらぎら眼を光らせていたのは、この「脱出」であった。それはもはや自由を求めると言うような遙かなものへの憧憬ではない、そのような距離はもうなくなっている筈であり、それは失望もまた要求よりは決して大きくないところの小さな要求である。追いつめる不安が強くなればなるほど、疲労が重苦しくのしかかってくればくるほど、カフカの背中にいる「脱出」はぎりぎりいっぱいな抵抗力でそれを支えるのである……

本野氏は、カフカ文学のすべてはこのような「脱出」への試みの連続であると述べる。それゆえに

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com